



赤木 健先生略譜

- |             |               |
|-------------|---------------|
| 1895年10月3日  | 岡山県に生る        |
| 1950年4月     | 東京女子高等師範学校講師  |
| 1950年6月     | お茶の水女子大学講師    |
| 1960年4月     | お茶の水女子大学教授    |
| 1961年3月     | お茶の水女子大学を定年退官 |
| 1984年10月25日 | 脳血栓のため逝去      |

## 赤木 健先生を偲ぶ

石と和菓子と人生論——赤木先生の教えをうけた卒業生諸姉の多くが、先生を偲ぶたびに思い起すのはこの3つの話題であろう。先生はお茶の水女子大に十年余の教職歴をお持ちであるが、決して根っからの教師ではなかった。第二次大戦後間もなく東京女高師の講師として迎えられる以前は、地質調査所技師の18年間と民間の鉱業開発会社での6年間、国内国外の地質調査と資源探査にたずさわっており、その間恐らく教壇に立たれたことはなかった。お茶大における先生の教育者としての信条は、長い調査と研究生生活の間に得られた地質学の素材をコアに、全人間的教育の一端を披瀝しようとする姿勢に示されていたと思う。

新制大学発足と同時に、地理学科のカリキュラムのうち先生は自然地理学の基礎として重要な一般地質学・岩石鉱物学・層位学などの講義を担当されたほか、一般教育課程の地学もうけ持たれた。人文系志向の多い学生たちを相手に、やや難解な講義内容であったかと思われるが、いつも親しみやすい口調で皆が理解するまで懇切にお話しになった。しかし試験は厳格で、岩石鑑定テストは学生一人づつを呼び出し、一人終ると別室に待機させるという方法であった。年一回の巡検は一年生を連れて秩父長瀬や伊豆大島に行かれることが多かったが、学生達にとって入学後最初の野外見学旅行であったので、大へん印象の深いものだったに違いない。2泊3日の日程のうち、昼はかなりの距離を歩いて露頭観察とルートマップの作成の実習、夜は宿所で見学事項の復習のかたわら人生とは何かの訓話が始まる。この時先生の間人教育の真骨頂が発揮される。お酒を全く嗜まぬ先生は、女子学生には甘い物をというわけで、羊羹や大福などの和菓子を皆にご馳走するのが常だった。そして体験をつうじての人生論が学生たちの心を打つ。人生論といってもゆきつく所は女性の幸福とは何かの命題で、お話は明治生れの頑固一徹さに貫かれていた。よき師よき友さらによき配偶者に恵まれることがあなた方の幸せの元でありますからという教訓を、中には笑って聞き流した人があるかも知れない。今にして思い当たる者もそうでない者も、ともかく懐しきは消えないであろう。

先生の小柄でスマートな肢体、けわしい山道を軽く踏み歩く身のこなしを、調査や登山に先生と同行するたびに拝見した。卒業生の有志の人達と黒部峡谷から立山越えをした折、日暮れて遠い闇の路を懐中電燈たよりに下山していると、先生は黙々と枯枝を集めてたばね、1メートルもある大きなたいまつを拵えた。熊を追振うためだとおっしゃる。常念岳から雨中の沢下りの時は、案内人を雇うと云われるので、そんなことをしなくても大丈夫でしょうと申し上げると、若い者は黙っておれと強お叱りをうけた。このあと増水した沢の下流で腰まで水につかりながら、見失った夏路を先導につづいて歩く難行となり、同行者一同危く遭難を免れた。先生の先見の明と決断力に敬服と感謝の思いをいたした。今先生のありし日のお姿を回想すると、はるか戦前戦中の時代に東南アジアの山野を歩かれていた頃の、小さくて能率的なハンマーを手に、筆記用具の矢立てと採集用の布袋を腰に、石を見つめてコツコツと休まずに歩かれたであろう光景が、なぜか鮮明に目に映る気がするのである。

蝶ネクタイがお似合いで少しお洒落な先生、やっと古稀におなりくらいかと信じていた先生、天寿とは云え突然の訃報に接し、心から愛惜の念にたえない。

浅海 重夫